

⑤1 新年摺

我がちになかぬさためか初からす
 あら玉のこゝろのとけきあした哉
 わか水を汲間しつかな早瀬かな
 竹縁の日なたそたちや福寿草
 はやけれどことしのものよ梅柳
 鶯の愛相もしたきはつ音かな
 誰も彼も無事かさかなよ屠蘇の式
 まきれずに往手の杜やはるの雪
 うくひすにゆたん見せけり庵の朝
 万歳やとしのころよき薄白髪
 鶴飼うて見たくなりけり松のうち
 あたらしう雪降そへることし哉
 火せゝりもさすかにうとし三ヶ日
 にこりなきとしのひかりや水の色
 鴨も身をきよめてういてはつ明り
 浪おとや一りんしろき梅の花
 鳥のなく里のはつれやうめ柳
 はつからす洲さきは闇をはなれ梟
 早誰か来しそ若菜をつみしあと
 鳥かけの冴るはさへて野のかすみ
 蔵ひらき船の手代も来たりけり
 噂するうちにうち出す齋かな
 おこたらぬ日あしにならふ柳哉
 ふくわらのふまれて清し雪霽
 梅か香の吹たらまるや笠のうち
 野へ出ればつれはありけり若菜摘
 うくひすもよんで見せたし初こよみ
 是もまたわか家にふるし雑煮椀
 しつかさかとしの花なり山かつら
 松竹もけさはとおもふはつ日かな
 蝶あそへ我もかりたき芝のうへ
 梅見るや凍てのぬかりの岨つたひ

芹舎 拾山 稲處 百可 潮水 朝逸 卓志 周策 晚香 流扈 五莒 得齋 蝸石 静雄 鶴楼 真海 真水 真中 果樵 はしめ 静處 荷庵 素陽 祖康 三楓 秋湖 蓬宇 石芝 藹村 葱畝 舞巾 十湖

うくひすやはつ音にかゝる力あし
 炉によれば稲つむこゝろおほへけり
 おりかけし機やむしろや桃の花
 若水や折を笑みたる冬至梅
 立かへるとしのきほひやまつ風の
 寒さにも朝寝きらひや松のうち
 御降や眠気さすころ茶のほひ
 年礼やまつ師の前をいひはしめ
 縁さきやそれし手鞠を猫の追ふ
 神の灯の膳にかけさす雑煮哉
 寒いのでみなそこゝの礼者かな
 一月もはやふ間にあふ齋かな
 家ことにかゝやくものやかゝみもち
 日のかげの野にひろかりぬ初雲雀
 ひく人に齡ゆつるか野の小松
 たつとしのきほひや梅も室放れ
 きぬゝの沙汰はものかは初からす
 いなゝくやはつ荷おろした門の馬
 破魔弓やとし徳棚をうしろたて
 門松やつねにもほしき風のおと
 汐さきのはれゝしさよはつ日の出
 若水やくみあける手も星あかり
 身にあつき親のめくみや節小袖
 万歳のわらひに嵩むふくろかな
 ひからせておく鍬鎌やとしの花
 うくひすやけさは氷らぬ筆のさき
 雨となる夕空ひくしいかのほり
 夜も雪解するよ茶臼のひきこゝろ
 いそかしきうちにとしたつ農家哉
 井ひらきやのそけはふかき去年の闇
 寝て聞たからす見にけり初手水
 藪とのみ見て居し中に梅の花
 わたるにもうれし恵方へむかふ橋
 島畑のそらもあまさす啼ひはり
 若水やしはし手桶のおきところ
 玉と見る松のしつくや初日かけ
 寝しつめは琴も鳴すか嫁か君
 一日やわかうなりたる起こゝろ

駿河 蛭堂 斗大 成叟 乙彦 壽道 雪蕉 篤雅 枕溪 秋山 香芸 雷石 左岳 半拙 竹良 草國 其殘 省我 伏龜 凌冬 竹斐 司松 一壽 琴声 龜歳 梅風 素仙 樂二 春曉 旭扇 碩宇 瓢徳 茶遊 晴雲 西蘭 布尺 素笛 守月